

「バンクシー&ストリートアーティスト展」を見て

活水女子大学名誉教授 津田 礼子



1. 展示会場入口.

本展覧会をキュレートしたパトリツィア・カッタネオ・モレシ氏は、「グラフィック時代を築いた先駆者や主要アーティストらの作品も展示するほか、国際的なストリートアートシーンになくはないアーティストらも幅広く紹介する」と述べる。バンクシーが広げたストリートアートの世界からその



2. TAKI183 無題



3. バンクシー 投げる人

本質に迫るとい趣旨のものである。モレシ氏監修・執筆の図録には副題が「バンクシー:グラフィティの申し子、ストリートアートの父」とあり、氏は「バンクシーについてはいろいろな意見があるだろうが」としながらも、「バンクシーの登場はストリートアート、乃至アート全般の歴史の転換点となった」と述べる。「美術史家らは、『バンクシー以前』と『バンクシー以降』という区分で歴史を語るようになるだろう」と。

「今、なぜストリートなのか」、「現代アートの芸術性とは何なのか」という疑問に対し、未だ充分に答えを出せずにいるが、モレシ氏の解説はこの問いへの解答の一つを提示するものである。今日のアートが以前の「芸術」の概念を超えて社会へ広がり、展開しているという現象を改めて認識する。バンクシーの作品は政治的・社会的メッセージを伝えるアクティビティとしての意味をもち、現代アートのムーブメントの一つとなっているが、ストリートと SNS を媒体とすることも世界へ広がる力となっているのだろう。絵画(芸術)とはまた別の種類のアートと考える方が妥当かもしれない。

今回展示されたバンクシー自身の作品は、ほとんどがシルクスクリーンによるものであり、実物はインターネットの画像で観るより構図、色彩の美しさを感じられた。メッセージを伝える広告としての効果は非常に高いと感じた。タイトルや画中の文字が表現の大きな一部として一体となっている。広告デザインとしての要素が強く、それによって見る人にむしろダイレクトにメッセージを伝えているとも考えられる。表現技法において《Soup Cans》など、アンディー・ウォーホルの影響を直接感じさせると同時に、消費社会を肯定するウォーホルに対し反商業主義の内容を表わす点で対極にある。

註 1)

パレスハウステンボス(ハウステンボス宮殿)・庭園

17世紀にハーグの森に建てられた宮殿の外観を、忠実に再現。オランダ女王陛下の夏の住まい、現在はウイレム=アレクサンダー国王の住まいになっている。

庭園はオランダ・バロック様式。18世紀、フランスの造園家ダニエル・マローがオランダの宮殿のために設計し実現しなかった「幻の庭園」であるが、保存されていた図面をもとにハウステンボスに甦らせられた。



4. パレスハウステンボス室内



5. パレスハウステンボス室内から
庭園の眺め



6. ハウステンボス庭園